

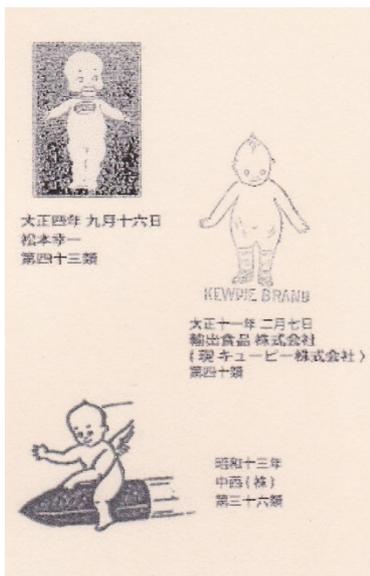
キューピーとは(その 2)

前回(サロン 212 回)ではキューピーの年表、キューピー誕生などを書きましたが、今回は作者のローズ・オニールが求めたキューピーの姿について述べることにしましょう。

ローズ・オニールが求めていたキューピー像がどのようなものであったかは、1913 年 3 月 4 日に登録されたアメリカ意匠特許第 43680 号に述べられています。

- ・カブのようなとがった一房のヘアースタイル
- ・小さく短い眉毛
- ・丸く大きく左右どちらかを見ている眼
- ・ピンクに彩られ少し膨らんだ頬
- ・微笑むように僅かに上がっている口角
- ・うつむき加減のあご
- ・体から少し離れた位置で開き気味の腕
- ・大きく開いた手のひら
- ・ぽってりとしたお腹
- ・2.5~3 等身のバランス
- ・背中に生えた小さな羽
- ・判別できない性別

こういったものがローズ・オニールの求めるキューピー像です。下のキューピーをご覧ください。



日本で登録された商標



日本製セルロイドキューピー

これでは確かにローズ・オニールが求めたキューピー像ではないですね。しかしキューピーはもはやローズ・オニールの手から離れた存在となっていました。そのため発注が終了した後も日本でキューピーが作り続けられます。西洋文化の匂いがするキューピーは近代化のシンボルとなり、広告に採用され、絵葉書や年賀状となり、童謡が登場するなど国民的キャラクターとなりました。

その中で大きな役割を果たしたのがセルロイドです。安価で大量生産できるセルロイドキューピーは、何処の家にもありセルロイド玩具の代名詞ともなりました。またキューピーの本国であるアメリカをはじめとする諸外国にも大量に輸出されました。

で、このセルロイドキューピーですが「セルヤ」と呼ばれる成型加工屋と「着色ヤ」と言われる色付けとがありました。大規模な業者もありましたが、大半は零細もしくは家族経営の「下職さん」とよばれる小さな工場で2月～8月にかけてセルロイドの仕事をして、他の時には別の仕事をしていました。そしてさらにバリ取り、ゴム紐による手足の取り付け、つなぎ目の削り、洋服作りなどといった仕事は「内職さん」に頼み込んだりしていました。そのため実に様々なキューピーが生まれたわけです。

今回はここまでとして、次回はキューピーがその後どのようになっていったかを述べることにいたします。